

## 藤井 輝夫 新総長のプロフィール

このたび、第31代東京大学総長となりました藤井輝夫先生は、本所においては、長年、機械・生体系部門およびマイクロメカトロニクス国際研究センターの教授として活躍してこられました。2015年から2018年までは、第24代生産技術研究所長として、研究所全般の運営に多大な貢献をされてきました。また、工学系研究科の精密工学専攻およびバイオエンジニアリング専攻の2専攻の教授として、教育および研究に携わってこられました。

本所における研究、教育、さらには組織運営に関する藤井先生の多大なるご貢献は、多くの構成員がすでに存じのところでありますが、先生のご業績について、いくつか紹介させていただきます。

藤井先生が所長のときに新たに立ち上げられた「価値創造デザイン推進基盤」は、これまで本所には存在しなかった新しい概念に基づく研究・教育施設です。従来にはない斬新な考え方をベースに、ゼロからのスタートで新たな施設や組織を作りあげるのには、ご苦労が多かったものと拝察します。この困難を先生持前のリーダーシップと忍耐力で乗り越えて、今では、世界的にみてもユニークな素晴らしい組織として運営されています。ニューヨークオフィス（UTokyoNY）につきましても、医科学研究所と連携して、寄付の税額控除が受けられるNPO法人を米国で立ち上げられました。藤井先生のイニシアチブで立ち上がったニューヨークオフィスは発展し、現在は、全学の組織として運営されています。

所長をご退任後は、ただちに本学の大学執行役・副

学長に就任し、社会連携本部長として大学全体の運営にコミットされました。2019年からは、理事・副学長として、社会連携の仕事だけではなく、財務、産学協創、エグゼクティブ・マネジメント・プログラム（EMP）などの全学の運営を取り仕切る幹部として、八面六臂のご活躍をされております。

私自身は、藤井先生が所長のときの3年間を副所長として、また、副学長のときには、2年間を社会連携副本部長として、部下として働く機会に恵まれました。長年、近くで藤井先生をみていて感服いたしますのは、「カッコよさ」と「優しさ」、そして「卓越したリーダーシップ」です。イケメンでとても優しくお洒落であるが故に、女性からモテるのは当然ですが、男性からも慕われ、「藤井親分のためなら」と（私を含め）男も惚れさせる先生のキャラは、持って生まれた人間性とカリスマ性のなせる業かと思っております。

藤井先生のプロフィールについては、先生が所長にご就任されたときに、新野俊樹教授により、若かりし頃のエピソードも含め紹介されております。ここでは、先生のご研究やご趣味について紹介できませんので、是非ともそちらもご覧ください。（生研ニュース No.153, (2015年4月), p.4)

生研の一構成員として、本所から総長が誕生したことは、この上もない誇りです。先生の持前の優しさとリーダーシップ、先見性、卓越した国際的センスを存分に発揮されて、本学がより良い組織として発展していくことを祈念しております。

（物質・環境系部門 教授 岡部 徹）



## 藤井 輝夫 先生 略歴

## 学歴（大学卒業以降）

昭和63年（1988）	3月	東京大学工学部船舶工学科卒業
平成 2年（1990）	3月	東京大学大学院工学系研究科船舶工学専攻修士課程修了
平成 5年（1993）	3月	東京大学大学院工学系研究科船舶海洋工学専攻博士課程修了

## 職歴

平成 3年（1991）	4月	日本学術振興会特別研究員（DC）（平成5年3月まで）
平成 5年（1993）	4月	東京大学生産技術研究所グローブエンジニアリング（トヨタ）寄付研究部門客員助教授
平成 6年（1994）	11月	東京大学生産技術研究所助教授
平成 7年（1995）	4月	理化学研究所基礎科学特別研究員（化学工学研究室）
平成 8年（1996）	4月	理化学研究所研究員（生化学システム研究室）
平成11年（1999）	4月	東京大学生産技術研究所附属海中工学研究センター助教授
平成15年（2003）	3月	ヌシャテル大学マイクロテクノロジー研究所客員研究員（平成15年12月まで）
平成17年（2005）	10月	文部科学省参与（高等教育担当）兼務（平成20年3月まで）
平成19年（2007）	2月	東京大学生産技術研究所附属マイクロメカトロニクス国際研究センター教授
平成19年（2007）	9月	LIMMS/CNRS-IIS(UMI2820)共同ディレクター（平成26年8月まで）
平成24年（2012）	4月	東京大学総長補佐（平成25年3月まで）
平成25年（2013）	4月	東京大学生産技術研究所副所長（平成27年3月まで）
平成27年（2015）	4月	東京大学生産技術研究所長（平成30年3月まで）
平成30年（2018）	4月	東京大学大学執行役・副学長（平成31年3月まで）
平成30年（2018）	4月	東京大学社会連携本部長（令和3年3月31日まで）
平成31年（2019）	4月	東京大学理事・副学長、EMP室長（令和3年3月31日まで）
令和 3年（2021）	4月	東京大学総長 （現在に至る）

# 生研ニュース

2021.4 (No.189)

2021.7 (No.190) 抜粋

# 生研 ニュース

IIS NEWS  
No.189  
2021.4



●新所長  
岡部 徹 (右)  
●前所長  
岸 利治 (左)

IIS  
TODAY

本号の表紙には、第25代所長を務められました岸利治前所長と、その職を引き継がれる岡部徹新所長にご登場いただきました。

岸所長は、本所設立70周年記念事業の中で、日本のロケット開発の歴史が糸川英夫先生の本所内での活動に端を発することを明確にし、これを起点に、その後の開発で緑のある自治体との地域連携活動につなげるべく「科学自然都市協創連合」の設立にご尽力されました。さらに、URA (University Research Administrator) の拡充を進めて、研究部と事務部の連携をより強化することで、本所の研究環境の改善にも大きく貢献されています。

第26代所長となられる岡部徹新所長は、岸前所長と共に、藤井元所長（本年度より本学総長）のもとで本所

や本学の運営に携わり、以降も連携して深い信頼関係を築いてこられました。現在、コロナ禍が続く未曾有の状況下にあります。岸前所長との協力体制を基に、本所運営の円滑な継承および発展に取り組まれるものと期待されます。岡部新所長のご専門は循環資源・材料プロセス工学で、持続可能な社会の実現に不可欠なレアメタルの精錬・リサイクル技術の研究開発に忍耐強く取り組んでこられました。今回の着任にあたり、本所の若手研究者が、自身が信じる方向で思う存分研究できる「研究者の楽園」をつくるべく努力したいというお言葉をいただいております。新所長を中心に、本所が社会に貢献できるよう教職員一同一層励んで参りますので、皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(広報室 吉永 直樹)

# 所長就任にあたって



岡部 徹

このたび、岸利治前所長の後任として、第26代の生産技術研究所長に就任いたしました。

京都大学、米国マサチューセッツ工科大学 (MIT)、東北大学と数々の組織を転々として参りましたが、20年前の2001年、東京大学 生産技術研究所 (生研) に迎えていただきました。それまでは、超マイナーなレアメタルの研究に特化した「一匹狼の研究者」として各所を渡り歩き、東大とはまったく縁もゆかりもなかった私にとって、生研はまさに「研究者の楽園」でした。

生研では、若いころから独立研究者として、自由に、好き勝手の研究に専念させていただいたことを心から感謝しております。また、大好きなレアメタルの研究だけでなく、国際連携、産学連携、各種アウトリーチ活動など、実に多岐にわたる対外活動も自由にやらせていただきました。

思い起こせば、私が若かったころから、生研の教員や職員の方々から“幾多の素晴らしいサポート”をいただけてきました。産学連携、国際連携、外部資金の獲得の方法、さらには、賞のとり方などを、生研の皆さまに教えていただきました。また、私は様々なトラブルを起こしましたが、生研の皆さまに守っていただきました。

この生研の“素晴らしい環境”のもと、私が若いころに受けた、多くの貴重なサポートに対し、これからは、少しでも「恩返し」すべく、教員、とくに「若手の教員」が今よりさらに自由に活躍できる環境を作って、生研が今後も活気に溢れた素晴らしい研究所として発展できるように貢献したいと考えております。

若手の教員の皆さんは、遠慮なく、何でもご相談ください。今の私には、所長として、どのような協力ができるかはわかりませんが、何事も前向きに取り組むつもりです。

また、教員だけでなく、職員の方々にとっても生研が「幸せに仕事ができる組織」となるよう、鋭意努

力するつもりです。皆様からの忌憚のない忠告やサジェッションをいただければ幸いです。

生研は今でも十分に素晴らしい組織であると思っておりますが、皆様の応援のもと、これから3年間、生研がさらに良くなるよう全力を傾注いたします。

当面は、岸 前所長、藤井 前々所長が行なってこられた方針を踏襲し、着実に発展させる「尺取り虫作戦」、すなわち、地に足がついた“地味な運営”を心掛けます。具体的には、藤井先生が新たに立ち上げられた、デザイン分野等の新しい流れの導入、ニューヨークオフィス関連活動の支援、岸先生が鋭意取り組んでこられた設立70周年関連事業や大漁旗プロジェクト、各種地域連携、将来構想プロジェクトなど、基本的には一連の活動を継承・発展させることが柱です。

また、生研だけではなく、藤井総長が率いる東京大学・全学を支える“強力かつ信頼できる高いパフォーマンスの部局”として鋭意運営し、産学連携、国際連携など全学の盛り上げにも少しでも貢献したいと考えております。

研究と教育を最優先に考えることは当然ながら、同時に、東大全学で横断的に活躍する幹部を、将来、生研から輩出できるよう、プロモートしたいとも考えております。

私は、これまでの2年間、副学長、社会連携副本部長として、藤井先生の下で、東大全体の管理業務も担当して参りました。このため、東大本部の関係者、さらには他部局の幹部にも、多くの知り合いができました。こうした意味では、「本部との強い連携」、さらには、「部局間の連携」等がスムーズに進められる人脈も今の私の強みの一つと思っております。

コロナ禍下で大変な状況ではありますが、「元気に明るく前向きに」をモットーに、所の環境、とくに研究環境が少しでも良くなるよう、頑張ります。皆様におかれましても、どうか、ご協力、ご支援くださいますよう、改めてお願い申し上げます。

最後に、3年間にわたり、リーダーとして新しいことに挑戦し、また、緻密な解析と判断力で本所を牽引していただきました岸利治先生のこれまでのご尽力に心から感謝を申し上げ、就任の挨拶とさせていただきます。

## 新所長紹介 岡部 徹 教授

新所長の岡部 徹 教授は、本所におきましては、物質・環境系部門、サステナブル材料国際研究センターおよびその後続の、持続型エネルギー・材料統合研究センターの教授として長年活躍されてきました。同時に、工学系研究科マテリアル工学専攻の教授として、教育および研究に深く関わってこられました。また、組織運営におきましては、2014年度に総長補佐として、2015年度から4年間、副所長として、2019年度から2年間、副学長および社会連携本部副本部長として、本学・本所に多大なる貢献をされてきました。

岡部先生の専門分野は非鉄金属製錬・精錬であり、特にチタンの精錬をはじめとする「レアメタルの製錬・精錬およびリサイクル」に関する研究に、学生の頃から30年以上にわたり、一貫して取り組まれてきました。今でこそ、レアメタルの製錬・精錬プロセスやリサイクルの重要性が広く認知されておりますが、研究開始当初は専門家でさえも、その意義や重要性を十分に理解できていなかったようです。当時、流行りの研究テーマの方が学術論文等の業績に直結し、外部資金を獲得しやすかったのは事実で、この分野の重要性を認識していたごく少数の研究者も離れていった、と話されています。

風向きが変わったのは10～15年ほど前で、2006年頃からの情報技術 (IT) の発展にともなうレアメタル需要の急激な増加、また2010年に尖閣諸島の領有問題に端を発した外交問題、特に中国がレアアースの輸出を突如停止したことにもなうレアアース価格の高騰などがきっかけとなったようです。最近では、世界的なESG投資の流れの中で、電気自動車徐徐に市場シェアを拡大させており、「(次世代の)自動車は“走るレアメタル”になる」といった岡部先生の予言通りの未来が、思いのほか早く訪れるかもしれません。

岡部先生は、真にサステナブルな社会の実現に不可欠な、レアメタルの製錬・精錬およびリサイクル技術に関して、単に学術的な観点のみからではなく、社会における位置づけやプロセスにもなって生じる有害な廃棄物、環境破壊の影響も考慮し、幅広い視野で地道に研究を進められております。先生の卓越した先見性、本質を見抜く力と強靱な忍耐力が窺い知れます。

産学連携におきましても、非鉄金属資源循環工学寄付研究部門 (JX金属寄付ユニット) を立ち上げるとともに、産学連携研究協力協定といった組織間の新たな連携の枠組みの中で、ニチコン株式会社、日本航空電子工業株式会社とそれぞれ大規模な研究・教育活動を推進されています。いずれも単なる連携ではなく、企業人の教育・育成にも力を入れていることが特徴の一つで、企業の若手研究者を本所に駐在させ、学術的知

識や考え方を深く学ぶための場が提供されています。さらには、毎回100～300名の産官学関係者が集まる会合「レアメタル研究会」を年に数回主催し、また、その国際RMW (Reactive Metal Workshop) を2006年よりほぼ毎年、主として米国マサチューセッツ工科大学 (MIT) にて主催されています。

岡部先生の研究教育活動は大学内のみにとどまらず、例えば、中高生向けの出張授業、職場体験・研究実習体験の場の提供、レアメタルや自然科学に関する各種講義のオンライン配信など、一般向けにも教育・啓蒙活動を展開されています。また、多様な研究・教育活動を展開されている傍ら、武蔵野市立第三小学校のジャンボリー・リーダーを始めとする地域貢献も、長年にわたって継続的に行われています。このように凄まじい活動量の岡部先生ですが、藤井 輝夫 新総長のアドバイスで始められた早朝ジョギングを現在2年近く継続されているそうで、ますます持久力に磨きがかかってきたとのことでした。

岡部先生は目力が強く、鋭いご発言をされることも多いので、強烈な印象をお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。しかし、実際は気さくで飾らず、細やかな気遣いをされる先生です。一方で、研究に対しては非常にシビアな視点をお持ちで、いつも客観的な根拠に基づいた論理的かつ明快な議論を展開されます。MITでの研究のご経験や、プロセスの実現可能性を明確に判別できる熱力学をご専門とされていることなどが影響しているのかもしれません。

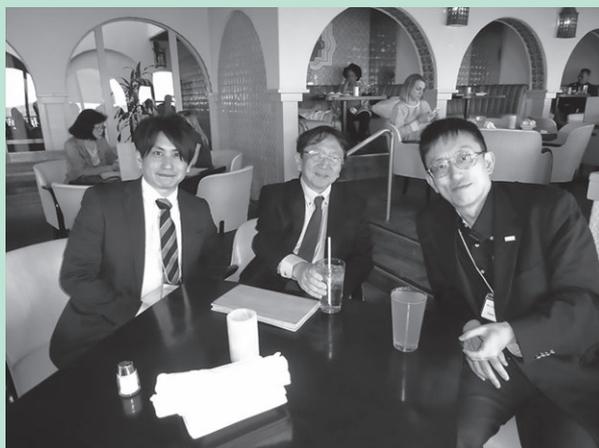
最近では、組織全体のことを考えて、後進の育成に力を入れられているように感じます。例えば私も、着任直後の2016年度から主催者の一人としてRMWの運営に関わらせていただいております。その他一連の活動を通して、単独では学べない多くの事柄を学ばせていただいております。特に印象的なのは、教員と事務職員の連携の重要性を常に強調されていることです。研究や学問は自由な発想・姿勢で行うもので、人それぞれに合った取り組み方や社会への還元の方法があることは、私が本所の諸先輩方のご活躍を拝見して学ばせていただいたことですが、岡部先生も「所内全スタッフの相互連携」を道標として、自ら体現しておられます。

このたび岡部先生は所長という大任を快くお引き受けくださいました。岡部新所長のリーダーシップのもと、生産技術研究所の構成員全員が一丸となって、個別の活動および組織全体の活動を、より一層発展させられることを確信しております。

(物質・環境系部門 准教授 八木 俊介)

## 岡部 徹 新所長 略歴

- 昭和40年（1965） 京都生まれ
  - 昭和59年（1984） 筑波大学附属高等学校卒業
  - 昭和63年（1988） 京都大学工学部冶金学科卒業
  - 平成 2年（1990） 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
  - 平成 5年（1993） 京都大学大学院工学研究科博士課程修了
  - 平成 5年（1993） 日本学術振興会海外特別研究員／マサチューセッツ工科大学博士研究員
  - 平成 7年（1995） マサチューセッツ工科大学博士研究員(MIT Postdoctoral Associate)
  - 平成 7年（1995） 東北大学素材工学研究所・助手（現：多元物質科学研究所）
  - 平成13年（2001） 東京大学生産技術研究所・助教授
  - 平成21年（2009） 東京大学生産技術研究所・教授
  - 平成24年（2012） 東京大学生産技術研究所・特任教授（兼務）（非鉄金属資源循環工学寄付研究部門）
  - 平成24年（2012） 東京大学大学院総合文化研究科・教授（兼務）（附属国際環境学教育機構）
  - 平成25年（2013） 東京大学生産技術研究所 サステイナブル材料国際研究センター センター長
  - 平成26年（2014） 東京大学 総長補佐
  - 平成27年（2015） 東京大学生産技術研究所・副所長（2019年まで4年間）
  - 平成28年（2016） 東京大学生産技術研究所 持続型エネルギー・材料統合研究センター センター長
  - 平成31年（2019） 東京大学・副学長、東京大学 社会連携本部 副本部長
  - 令和 3年（2021） 東京大学生産技術研究所・所長
- 現在に至る



米国カリフォルニア州 La Jolla（ラホヤ）海岸のカフェにて。  
左から、八木 俊介 准教授、森田 一樹 教授、岡部 徹 教授  
(2020年2月29日)



米国版のRMW（Reactive Metal Workshop）での集合写真@サンディエゴ大。  
(2020年2月28日)